HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語学習者のジェスチャーが母語話者による評価に与える影響
Author(s)	柳町, 智治
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 4, 102-114
Issue Date	2000-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45590
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC004_007.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第4号　(2000) [研究論文]

日本語学習者のジェスチャーが母語話者による評価に与える影響

柳町智治

要　旨

本稿では、学習者が談話中に使用するジェスチャーが日本語母語話者による評価にどう影響するかを調査した。学習者によるジェスチャーの使用は、ストーリーの「わかりやすさ」を増し、「熱心な語り手」としての印象を与える点で肯定的な評価につながる傾向が見られた。他方で、学習者の「日本語力」の評価との関連から見ると、ジェスチャーの使用は、学習者の口頭表現能力の不足を補完する伝達手段としてみなされる傾向があり、狭義の日本語能力という面では、母語話者からマイナスの評価を受ける傾向が見られた。このように本稿のデータでは、従来の研究が示唆しているような非言語情報の存在が一律に母語話者による評価を押し上げる結果とはならず、母語話者が学習者のジェスチャー使用を「わかりやすさ」「語り手としての印象」「日本語力」に関して、別々の基準を用いて評価している様子が観察された。

〔キーワード〕日本人評価、ジェスチャー、わかりやすさ、日本語能力

1. 問題の背景

近年の談話分析や会話分析の研究の進展によって、言語情報だけでなく、視線、姿勢、ジェスチャー等の非言語情報が我々のコミュニケーション活動に深く関与している実態が明らかになりつつある。しかしながら、日本語教育においては、あいづちの使用をめぐる問題が頻繁に取り扱われてきている以外は、非言語コミュニケーションに関連するトピックで目立った進展は見られない。しかし、外国語学習者の非言語行動は、接触した母語話者がその学習者の外国語能力を評価する際の重要な要因の一つとなり得る点で、外国語教育研究にとっても軽視できない問題なのである。

学習者の非言語行動が母語話者による評価に与える影響を調べる一つの方法として、非言語情報が発話と共に評価者に提示された場合と、発話の

みが提示された場合で、評価が異なるかを調査することがある。このタイプの研究のひとつである Nambiar and Goon (1993) によると、マレーシアの大学での英語履修者を対象にインタビューとロールプレーによる会話テストを行った結果、両テストとも「テスト現場での評価」は「録音されたテストを聞きながらの評価」より高くなったという。録音資料のみに基づく評価方法では非言語情報が欠落していたために、結果として採点者による低い評価につながったとされている。さらに、Gullberg (1998) は、スウェーデン語学習者（母語はフランス語）とフランス語学習者（母語はスウェーデン語）の発話に共起したジェスチャーと母語話者による評価の関係を調べているが、この研究でも「ビデオ映像を見ながらの評価」は「音声のみによる評価」より高くなったと報告されている。このように両先行研究は、非言語情報の存在が母語話者による評価を高くする可能性のあることを示唆しているのである。

また、評価者の主観的評価と学習者の発話を数量的に分析した結果との関係から見ると、Gullberg (1998) には、学習者が使用するジェスチャーの頻度と評価者の実感は必ずしも一致しなかったという報告がある。つまり、ジェスチャーの実際の頻度が高くても聞き手には低いと映ったケースと、逆に頻度が低くても評価者には高いと感じられたケースがあったのである。さらに非言語行動を扱った研究ではないが、Albrechtsen et al. (1980) によると、デンマーク人学習者の英語に対する英語母語話者の評価のうち、語彙、音声、文法の言語的正確さに関する母語話者の主観的評価は、学習者の発話の客観的な分析結果と相関関係にあったが、「わかりやすさ」の主観的評価については、言語的正確さとの間に相関関係は見られず、コミュニケーション・ストラテジーの使用とのみ負の相関関係があったという。また日本語学習者のデータを扱った石崎 (1999) でも、母語話者の「わかりやすさ」の主観的評価は、語・文法上の誤りとは相関がなく、異なり語数、音の高低とのみ連動していたと報告されている。両研究は、「わかりやすさ」に関する母語話者の主観的評価は、文法的、音声的な正確さとは必ずしも一致しないことを示唆している。Okamura (1995) の調査では、日本語教師、非日本語教師もともに、日本語学習者が会話する際に一番大切な要素として「わかりやすさ」を挙げたとされるが、ジェスチャーの使用が母語話者による「わかりやすさ」の評価にどうつながるのかを調査した研究は、今のところ見られない。

以上の先行研究をうけ、本稿では英語を母語とする日本語学習者の独話データをもとに、非言語行動のうち特にストーリー構築の際に学習者が使用するジェスチャーに焦点を当て、非言語情報の有無が母語話者による評価に与える影響を日本語学習者のデータで検証するとともに、ジェスチャーの使用を「わかりやすさ」「日本語能力」の主観的評価との関わりから考察する。

2. 調査の目的

本稿は、日本語学習者の使用するジェスチャーと日本語母語話者の評価の関係のうち、特に以下の問題について考察する。

(1) 学習者のストーリー・リテリングおけるジェスチャーの有無は、母語話者による学習者の日本語力（上手か下手か）の評価に影響を与えるのか。

(2) 母語話者は学習者のジェスチャー使用を、「ストーリーのわかりやすさ」および「日本語力」との関係において、具体的にどのように評価するのか。

3. 調査の方法

(1) 評価者：12名の日本人大学生（男性８名、女性４名。在籍学部別の内訳は文系７名、理系５名)。平均年令は20.3才で、全員日頃から外国人と接する機会も海外滞在経験（平均0.5か月）もほとんどない者である。

(2) 学習者：初級後半から中級前半の日本語学習者６名（男性４名、女性２名）で、全員北米出身の英語母語話者。平均年令20.7才、母国における学習歴の平均は2.2年、滞日歴は平均5.4か月で、６人とも第二言語としてでなく外国語として日本語を学んだ経験の方が長い。

(3) 評価の対象となった学習者の独話データ：各学習者に２分間の音なしアニメーションビデオを見せた後、評価者とは別の日本人にそのストーリーの内容を伝えている様子をビデオ録画したもの（注１)。学習者が再現したストーリーの長さは最短１分49秒、最長３分54秒で、平均では２分40秒であった。

(4) 調査手順：

(a) 上の(3)にある６名の学習者の独話資料を、(1)の12名の日本人評価者に提示し評価してもらった。各評価者は６名の学習者のうち３名につ

いては「音声＋静止画像」のモード（以下、「静止画」）で、残りの３名については「音声＋動画」のモード（以下、「動画」）で評価した。つまり、各学習者は６名の評価者には静止画モードで、６名の評価者には動画モードで評価されている。両モードの違いはテレビモニター上の映像が動くか静止しているかの違いだけで、他の条件は全く同一である（注２）。また、学習者の談話データの提示順序とモードの種類（「静止画」か「動画」か）は、順番が評価に与える影響を相殺するためランダムに割り当てられている。

(b) 評価は、図１の【１】の質問を口頭で行い、学習者の日本語力について５段階で判定してもらい、その結果を集計した（注３）。さらに、【２】の質問を口頭で行いながら、評価者のプロトコルを収集した。【３】については各評価者が「動画」モードで評価した３名の学習者のビデオを見た後に、調査者の狙いが評価者の非言語行動に対する反応であることを悟られないように注意しながら、口頭で質問し回答を得た。

図１：評価者への口頭での質問項目

【１】この外国人の日本語力を判定してください。

下手	―――	やや下手	―――	普通	―――	やや上手	―――	上手
0		＋１		＋２		＋３		＋４

【２】この外国人について感じたことや思ったことを何でも話してください。

【３】（ビデオの場合のみ。さりげなく）ジェスチャーの使用量はどうでしたか。

少ない	―――	普通	―――	多い
0		＋１		＋２

4. 結果

まず、評価者への質問の【１】と【３】から得られた結果を、それぞれ下の図２、図３に示す。

図２：「日本語力」の評価（「静止画」モード vs.「動画」モード）

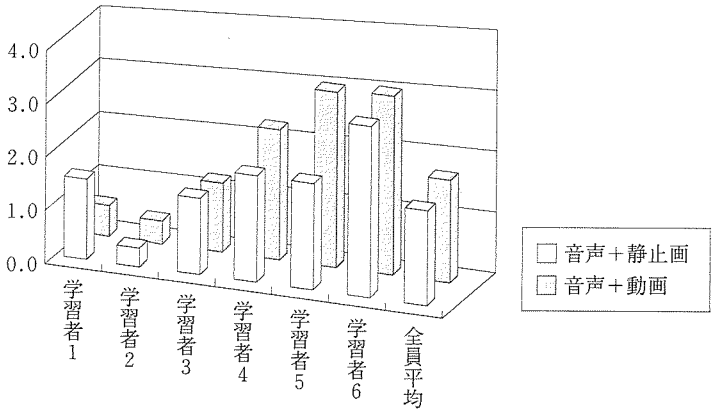

図３：ジェスチャーの頻度（実際 vs. 印象）

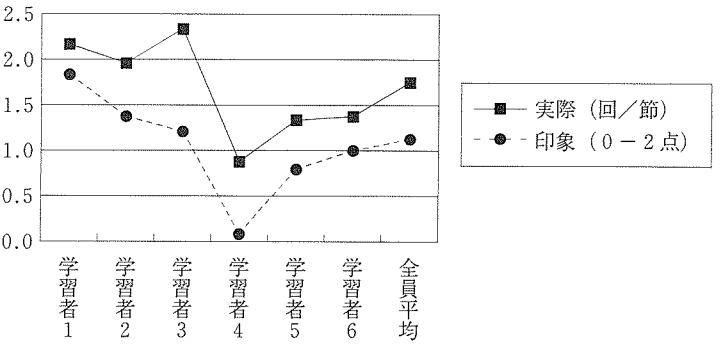

図２は【１】の質問に対する回答結果だが、「日本語力」の評価は、「静止画」モードに比べ「動画」モードで６名の学習者の全員の平均がわずかに上がっているが、ｔ検定の結果では両者に有意な差は認められなかった（$t = -0.68$、$p = 0.74$）。したがって、学習者全員の平均に関する限り、非言語情報が存在した方が発話のみの場合に比べ高い評価につながるという先行研究の結果は、ここでは支持されなかった。

ところが、学習者別に見てみると、図３でジェスチャーの頻度が低いとされたグループの学習者（４、５、６）は、図２の「静止画」から「動画」

で評価が上がる傾向があったのに対し、ジェスチャーが多いと判定されたグループの学習者（1、2、3）は、「動画」での評価は「静止画」と同程度か低い結果となっている。特に、6人の学習者中最も頻繁にジェスチャーを使用しているという印象を評価者に対して与えていた学習者1の場合、日本語力の評価が「静止画」に比べ「動画」で極端に低くなっている。このように、学習者全体の平均としては、非言語情報の有無は母語話者による評価に影響を与えないという結果が出たが、個々の学習者について見てみると、「日本語力」の評価に関する限り、ジェスチャーの使用は少ない方がプラスに働く傾向があるらしいことがわかる。

また図3で、ジェスチャーが実際に使用された頻度と評価者がもった印象を示す折れ線グラフがほぼ平行になっていることから、実際のジェスチャー使用量と母語話者の印象が連動する傾向にあったことがわかる。Gullberg（1998）で、スウェーデン語とフランス語の各学習者が使用したジェスチャーの頻度と評価者の実感にズレがあったのと違い、本稿の日本語母語話者の場合は学習者のジェスチャー使用量に敏感に反応していた様子がうかがえる。

5. 考察

ここでは、質問【2】で収集された評価者からのコメントをもとに前項での結果に更に検討を加えていくことにする。これらのコメントの分析してみると、母語話者による評価には、ジェスチャーとの関連において、大きく分類して3つの傾向があることが見えてくる。以下にその各傾向について考察していくことにする。

［傾向1］日本語母語話者の多くは、学習者の使用するジェスチャーがストーリーの理解の助けになると信じている。ただし、それが「日本語力」の評価につながるわけではない。

評価者とのインタビューから得られたプロトコルでまず注目すべき点は、ジェスチャーの使用をストーリーの内容と関連させて述べたコメントに繰り返し現れる「わかりやすい（づらい）」、「理解しやすい」というキーワードである。評価者の多くは、学習者の使用するジェスチャーは「ストーリー理解の助けになった」という感想を述べているが、ここで注目に

値するのは、評価者が「(ジェスチャーがあって) わかりやすい」と肯定的な評価をしたのは、あくまでストーリーの内容あるいは全体の印象であって、学習者の具体的な日本語能力に言及したものではないことである。つまり、評価者は「非言語情報がある。だから話がわかりやすくなったはずだ」という自身の信念に近い感想を述べ、それを「わかる」「わかりやすい」と表現する傾向があったのだが、それは必ずしも「日本語が上手」という評価には直結していない。実際、以下に例示されたプロトコルでも、「わかりやすさ」を評価するキーワードが話者の日本語能力に言及する表現と共起している例は見られない。このように、学習者のジェスチャー使用は、「わかりやすさ」の主観的評価とは連動していたが、それは「日本語力」の評価とは別に扱われていた様子がうかがえるのである。以下に、全10例の関連プロトコルのうちの数例を示す。

[ジェスチャー使用を「わかりやすさ」との関連でコメントした例]
(評=評価者の番号、学=評価された学習者の番号)

- 「手のジェスチャーみたいのがあってわかりやすかった。」(評12、学6)
- 「手ぶりがあるので、位置関係が絵として見えてきて、わかりやすい。」(評5、学3)
- 「動いている映像の方が聞きやすかった。手の動きがついている方が理解しやすい感じ。見ていて安心。(映像が) 止まっていると音声だけなので、集中していないといけない。予測が難しくなる。」(評12、全般)
- 「聞きにくい人はジェスチャーでわかる部分がある。」(評5、全般)
- 「ジェスチャーがあった方がわかりやすい。」(評4、全般)

[傾向2] 学習者によるストーリー中のジェスチャー使用は、語り手として好印象を評価者に与える傾向がある。

評価者のコメントには、ジェスチャーの使用が「一生懸命」「何か伝えよう、言おうとしている」という類いの表現と共起した例が全部で9例出現し、プロトコル中の多数派を形成している。この傾向も、上で見た[傾向1]同様、ジェスチャーの使用と関連して学習者に対する評価者のポジティブな反応が現れた結果だが、必ずしも学習者の「日本語力」に言及しているわけではない点には注意すべきである。むしろ「ストーリーの語り

手として好感がもてる」という意味合いに近く、狭義の言語能力よりも「語り手としての魅力」に対する評価である。このように談話中のジェスチャーは、熱心な語り手としてのイメージの構築と、評価者の好意的反応に貢献することがあり、逆に、ジェスチャーが少ない場合は、下の例にもある通り「ただ普通に話している」と、マイナスの評価を下されることになる。石崎（1999）は、言語能力の不十分な学習者でも、評価者に「真摯な」話し手と受け取られた場合は、「癪に障る」という心情的な評価項目でマイナスの評価が出てこなかったとしているが、談話中のジェスチャーについても、その使用が母語話者の心情的な評価にプラスに働くことがあるようである。以下に関連するプロトロルの事例を示す。

［ジェスチャー使用を「熱心さ」「好感」との関連でコメントした例］

- 「(ジェスチャーの多いのが) 一生懸命やっているという印象を与える。」（評６、学１）
- 「ジェスチャーで何とか伝えようとしている。強調したいところで力を入れている。好感をもった。」（評７、学１）
- 「(ジェスチャーが多いと)がんばっている感じ。下手な人が使うといい。」（評11、学２）
- 「身ぶり手ぶりがいっぱい。よく動いていた。何かメッセージを伝えようとしているのがよくわかった。」（評12、学３）
- 「ただ普通に話している。必死という感じがしなかった。印象的にはマイナス。」（評７、学３）

［傾向３］母語話者は学習者のジェスチャーは発話の不完全さを補足する二次的な伝達手段と捉えている。また、日本語能力の低い者ほどジェスチャーを多用すると考えている。

上述の［傾向１］や［傾向２］で、ジェスチャーの使用が「わかりやすさ」や「熱心な語り手」という肯定的な評価に直結していたのとは対照的に、「日本語力」との関連では、ジェスチャーの使用は日本語能力の不足している結果だと評価されている傾向が読み取れる。つまり評価者は、日本語力の低い学習者ほどそれをカバーするためジェスチャーが多くなりがちだと判断している可能性が高いのである。前出の図２を見ても、評価者

によってジェスチャーの使用が最も頻繁であると判断された学習者1の場合、「動画」での評価は「静止画」での評価に比べかなり低くなっており、また評価者のプロトコルでも、ジェスチャーの使用と日本語能力の関係に言及したものでは、この学習者に関するものが最も多い。逆に、ジェスチャー使用の頻度が比較的少なかった3名の学習者（4、5、6）については「動画」での評価が高くなる傾向にあった。

石崎（1999）は、言語能力に対する評価と心情に関する評価が異なった基準でなされていると報告しているが、本稿のジェスチャーの使用と評価の関係を見ても、[傾向1]や[傾向2]で言及のあった「わかりやすさ」あるいは「熱心さ」というタスクとしてのストーリー・リテリング全体の出来不出来を評価する部分と、話し手の語りの基礎となる「日本語力」を評価する部分では、学習者のジェスチャー使用が、異なる基準で評価されている可能性があると言える。

近年のジェスチャー研究では、外国語学習者だけでなく母語話者も、談話を構築する際に様々な談話機能が付与されたジェスチャーを使用していることが明らかにされている（例えば、McNeill 1992、Gullberg 1998、柳町 1999）が、本稿の母語話者の目には、ジェスチャーの使用は日本語能力が未発達の学習者が自己の実力不足を埋め合わせるために頼る緊急避難的な伝達チャンネルとして映っていることがうかがわれる。この傾向に分類されるコメントは、評価者のプロトコル中最も多く、18例にのぼっているが、以下にそのうちの数例を示す。

[ジェスチャー使用を「日本語力」との関連でコメントした例]

- 「言葉がまず第一でジェスチャーが第二。この人は言葉の方ができていたので、関係ない。ジェスチャーがいっぱいあって言葉が少ないとマイナス評価になる」（評12、学4）
- 「表現力が低い人はジェスチャーがあった方がよい。（表現力が）ある人はなくても大丈夫。」（評5、全般）
- 「手のふりが激しくて。言葉のもどかしさをジェスチャーでカバーしている。」（評6、学1）
- 「身ぶり手ぶりを使わなくても話せる人は自信がある感じ。意味のない身ぶり手ぶりが多い人は自信がもてない感じ。」（評10、全般）
- 「すぐに変換できる人はジェスチャーが少ない人」（評11、全般）

- 「メッセージを伝えたいという気持ちは伝わってくるが、日本語力がついてきていない。」（評12、学１）

6. まとめ

以上の結果考察をまとめると次のようになる。ジェスチャーの使用は、まずストーリーの内容の伝達や理解を促進し、ストーリーの語り手としての印象を良くする方向に働くことがある。特に日本語力の低い学習者の場合、ジェスチャーは語りの効果を増し、熱心で魅力的な話し手としてのアピールにつながることがある。しかし、これらの評価は、あくまで「わかりやすや」や「語り手としての好感度」に絡むものであり、必ずしも学習者の「日本語力」の評価に連動したものではない。むしろ日本語母語話者は、ジェスチャーの使用を、話者が語彙や文法能力の不足を補足する手段として捉えており、日本語力が未発達な学習者の談話に特徴的な現象と考えている傾向が見られる。つまり、狭義の日本語能力という面では、ジェスチャーは未だ日本語力の低い学習者が使用した場合、自らの能力の欠如の表明として観察され、その結果マイナス評価の要因となる可能性が高いと言える。したがって、本稿のデータに関する限り、従来の研究が示唆しているような、非言語情報の存在が一律に学習者の外国語能力の評価を押し上げる結果は見られなかった。そうではなく、母語話者は、ジェスチャーの使用を「わかりやすさ」「話し手としての印象」「日本語力」の評価との関わりで、別々の基準で捉えており、個々の学習者によって評価が変わってくる様子が観察されたのである。

また、Gullberg（1998）のスウェーデン語とフランス語を母語とする評価者とは対照的に、本稿の日本語母語話者の場合は、学習者が使用したジェスチャーの実際の頻度と自分たちの実感の間にズレが見られず、学習者のジェスチャー使用量に敏感に反応していた。さらに、日本語母語話者のプロトコル中には、「外国人としては（ジェスチャーが）少ない」、「外国人特有の激しいジェスチャーはなかった」、「（ジェスチャーが）日本人から見れば多い方」といったコメントがあり、母語話者は学習者のジェスチャー使用を外国人、特に西欧語母語話者に特徴的な行動であると考えている様子が伺えた。今回のデータは英語を母語とする学習者のものだけだったが、今後は例えば中国語、韓国語など、非西欧語を母語とする学習者のジェスチャー使用と日本人評価の関係も見ていく必要があるだろう。さら

に、ジェスチャーを頻度だけでなく、談話における機能別に見ていくことで、母語話者の評価がジェスチャーの存在によってどう影響を受けるのかに関して、より詳細な分析が可能になってくると考えられる。

＊本稿は、1999年11月に香港理工大学で開催された「第四回国際日本語教育・日本研究シンポジウム」でのパネルディスカッション「日本語母語話者は学習者の日本語をどう評価するか」で筆者が口頭発表した「学習者のジェスチャー使用は日本語母語話者による評価にどう影響するのか」を加筆修正したものである。なお本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)（課題番号12480058、代表者小林ミナ）の研究成果の一部である。

注

1：ビデオの内容とデータの収集法については同様の手法を用いたYanagimachi (2000) を参照のこと。ただし、本稿の各評価者の場合は、学習者の評価作業を始める前に、学習者が見たのと同じアニメを事前に見ている。

2：静止画、動画の各モードとも学習者と聞き手の日本人の頭部に当たる部分に紙を貼り、評価者には両者の顔が見えないようにした。これには、参加者の匿名性を確保するとともに、評価者の評価が話し手の身ぶり以外の要因に影響されるのを避ける狙いがあった。

3：実は、このような評価スケールを用いて結果を集計し統計処理することに問題がないわけではない。このスケールは、目盛りの等間隔性さえ保証されていない以上、厳密には得られたデータに基づいて四則演算を行うことはできないという議論がある（市川1991)。最近の第二言語学習研究には、この種のスケールで評価データを得るのではなく、「マグニチュード推定法」というもともと心理物理学で開発された測定法を使った研究も報告されている（Gass et al. 1999)。この手法は、言語学研究における文法性判断にも利用されている（Bard et al. 1996)。

参考文献

石崎晶子1999「学習者の言語行動に対する母語話者の評価－主観的評価と

客観的評価の関係－」『第二言語としての日本語の習得研究』３号、19-35

市川伸一（編著）1991『心理測定法への招待』サイエンス社

柳町智治1999「日本語学習者の口頭談話におけるジェスチャーと指示対象の特定」、『北海道大学留学センター紀要』３号、68-88

Albrechtsen, D., Henriksen, B., and Færch, C. (1980). Native speaker reactions to learners' spoken interlanguage. *Language Learning,* 30(2), 365-396.

Bard, E. G., Robertson, D., and Sorace, A. (1996). Magnitude estimation of linguistic acceptability. *Language,* 72(1), 32-68.

Gass, S., Mackey, A., Alvarez-Torres, M. J., and Fernandez-Garcia, M. (1999). The effects of task repetition on linguistic output. *Language Learning,* 49(4), 549-581.

Gullberg, M. (1998). *Gesture as a communication strategy in second language discourse: A study of learners of French and Swedish.* Lund, Sweden: Lund University Press.

McNeill, D. (1992). *Hand and mind: What gestures reveal about thought.* Chicago: University of Chicago Press.

Nambiar, M. K. and Goon, C. (1993). Assessment of oral skills: A comparison of scores obtained through audio recordings to those obtained through face-to-face evaluation. *RELC Journal,* 24(1), 15-31.

Okamura A. (1995). Teachers' and nonteachers' perception of elementary learners' spoken Japanese. *Modern Language Journal,* 79, 29-39.

Yanagimachi, T. (2000). JFL learners' referential-form choice in first- through third-person narratives. 『世界の日本語教育』、109-128.

Journal of the International Student Center Hokkaido University No. 4 (2000)

Native speakers' reactions to learners' use of gestures in oral narrative production

YANAGIMACHI, Tomoharu

This study examined the reactions of native speakers of Japanese to learners' use of gestures during oral narrative production. Video clips in which learners were telling stories were shown to Japanese-speaking judges with and without gestural information. Unlike the results reported in previous studies, the presence of gestural information did not uniformly raise native speakers' evaluation of learners' performance. Rather, native speakers reacted in different ways to learners' use of gestures: frequent use of gestures drew positive reactions from native judges with regards to the comprehensibility of narratives and speakers' attitudes as story tellers, but resulted in negative evaluations and comments in connection with learners' linguistic ability. It appears that native speakers believe that gestures are typically used by learners of low proficiency levels in order to compensate for their lack of linguistic ability.